

2015 県外研修報告

滋賀森林インストラクター会

■実施日 2015 年 12 月 12 日（土）～13 日（日）

■場 所 **第 1 日目** 速水林業「太田賀山林」太田賀ホースサービス
（三重県紀北町海山区上里 1 0 5 0 - 1）

第 2 日目 皇大神宮別宮
瀧原宮（たきはらのみや） 瀧原竝宮（たきはらならびのみや）
（三重県度会郡大紀町滝原 8 7 2）

■参加者 浅香剛、久山多代子、小西民人、佐々木建雄、篠部幸雄、杉本茂、
関澤友規子、高橋優、平田明ご夫妻

■内 容

第 1 日目 南草津駅に集合、チャーターしたマイクロバスで 8:30 に出発し、新名神、
伊勢自動車道、紀勢自動車道、国道 42 号線を走り抜いて、速水林業の研修場所
に予定を少し遅れて 11:00 頃到着。

一息入れる間もなく研修が始まりました。講師は速水林業代表の速水亨氏。
日本林業経営者協会会長、三重県森林審議会委員など公職多数、著書も「日



本林業を立て直す」など多数。
その多忙さは推して知るべし
ですが、我々の研修のため、
長時間熱心につき合ってくださいました。

講義の初っ端、まず質問さ
れたのは「路網密度」という
言葉。路網密度とは、1 ha 当
たりの林道、作業道の長さの
ことで、日本の平均は 17m。

講義で熱っぽく語る速水代表

ところが、速水林業の路網密度は 45m もあり、林業界でいち早く一気に機械化
を進めることができたのは、この様に路網の整備を他に先がけて地道にやってき
た結果とのことでした。

と、まあ、この様に始まった講義の内容は、話が進むにつれ、我々が知ってい

るつもりであった林業知識は、何と狭く浅いものであったか、思い知らされることとなるのです。

その一つを紹介します。

それは、持ち山の実態を徹底して数値化しデータ化することで、見えてくるものがあり、従来の様に、ベテランの経験則や経験値だけに頼っていては、絶対に新しいステップには踏み出せないということ。

その一例として、速水林業における1ha当たりの労働投入量を20年前、10年前、現在と比較してみると、20年前が413人であったのに対し、10年前が117人、現在は95人と、20年前に比較すると現在はほぼ75%もの削減率になっていること。そして、このデータを検証すると、施業で一番コストがかかっていたのが下刈りでした。このことから、下刈りを必要最小限に縮小、場合によっては、下刈りなしという対処の仕方では大きな問題はなく、大幅なコスト削減ができたということでした。

その他、目から鱗の事例がたくさんありましたが、紙面の関係で割愛し、森の現場を見せていただくことに……。

以下、写真で見て行くことにします。



まず驚いたのは、下草が多いこと。

これはイズセンリョウ。林床をびっしり埋めていました。



現場は、三重県でも南部に立地しているせいか、南方系と見られる植物が。上は大型のシダ類、名前は不明。左はテンダイウヤク[クスノキ科]

また、興味深い事例では……、
イチイガシの試験栽培地。きちんと枝
打ちをしてやると、広葉樹でも真っ直
ぐ育つのだそうです。



人工林ではあまり見かけない風景。
樹齢百年に近いヒノキの下では、
若齢のヒノキが育っています。



明るい林内。下草や低木
が自由奔放に育っています。

この看板には、森の現況
が記してあります。



速水林業では、国際的な機関である FSC の認証を日本国内で初めて取得しました。

FSC の森林認証は「環境保全の点から見て適切で、社会的な利益にか
ない、経済的にも持続可能な森林管理」を推進することを目的としてお
り、認証された森林から出された木材、木材製品にロゴマークを付けて
流通させるものです。このマークがついていたら、その証。



貯木場で出荷を待つ丸太。径が揃っています。かつ、年輪はほぼ同心円を描いている。



こちらは、カキの養殖用イカダに使う細い丸太。
養殖業者の評判が良くて、割と良い値で売れるとのこと。



育成中の苗木。
これは、従業員が速水林業の土地を借りて育てていて、植林の際は、速水林業に販売している。



苗木はビニールポットで育て、植栽の時は、ビニールをワンタッチで破り、そのまま穴に入れるだけ。直根は切らない。

以上が、研修第一日目の概要です。

現地を見れば、「目から鱗」の事例がいっぱいです。

百聞は一見に如かず。是非、現地にて実感されることをお勧めします。

また、ここでは、三浦しおん原作の林業小説・「神去村日常なあなあ」の映画ロケも行われました。

第二日目



研修第二日目は、皇大神宮(伊勢神宮内宮)の別宮・瀧原宮(たきはらのみや)と瀧原竝宮(たきはらならびのみや)。

参道入り口に立つと、鳥居越しに杉の大木を中心に鬱蒼とした自然林が茂り、神域独特の気を感じます。



ヒノキの鳥居にはサカキが飾られています。柱の表面に触れるとつるつるして気持ち良いですが、これは、小工(こたくみ)という式年遷宮の建築工事に携わる匠が、丹念にかんなをかけたことによるもの。

小工といえども、実際の腕は名人級の宮大工と思えば良いでしょう。



こちらが、平成26年に式年遷宮が行われた瀧原宮。この左側に、同じ大きさ、同じ造りの滝原竝宮があります。

瀧原宮には天照大御神の和御魂(にぎみたま)が、竝宮には天照大御神の荒御魂(あらみたま)が祀られています。和御魂は優しさ、静けさ、荒御魂は強さ、荒々しさなど、女性の両面の象徴か？

造りはシンプルな**神明造**。

高床式の穀倉から宮殿へと発展した独自の建築様式だそうです。

＊柱は**丸柱の掘立式**で、地中に埋め建てられている。

＊屋根は**切妻**で**茅葺き**。

＊屋根の両妻にある破風が延びて、屋根を貫き、**千木**となっている。

＊棟の上に**鯉木**が置き並べてある。

＊棟の両端を直接支えている**棟持柱**がある。

＊すべて直線式で、必要な覆金物や飾金物の他は、装飾や色彩はなく**素木造**である。



細部に目を移すと、真ん中の太い柱が棟持柱。その後方に見える2本の柱の上部に、少し隙間があるのにご注目。

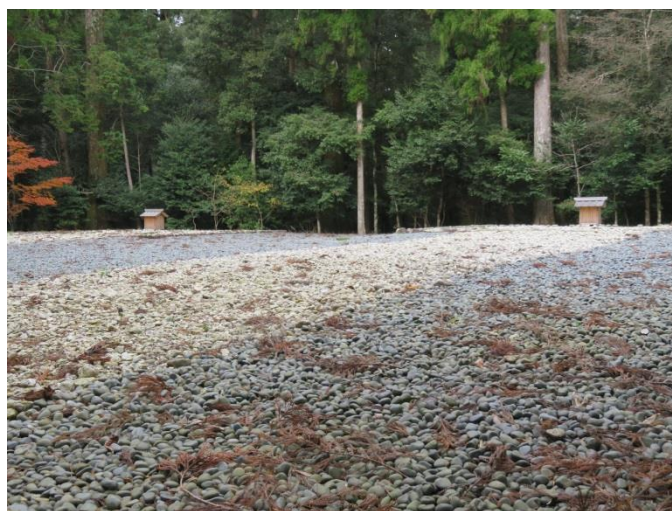
これは決して施工ミスではなく、掘立式の棟持柱が、経年変化の腐食などで下がった場合、重い屋根を受け止める備えとしてのもの。

この隙間が無くなる頃が、次の遷宮となるはず。



この広い更地は、次の遷宮の際、新宮殿の建設用地として、現在の建物の隣に準備されているもので、**古殿地**(こでんち)という呼称が使われています。

つまり、遷宮にあたっては、2倍の建設用地が必要ということになります。



ところで、世間一般に知られている伊勢神宮といえば、内宮と外宮から成っていると

いうイメージですが、伊勢神宮が、皇大神宮（内宮）、豊受大神宮（外宮）という御正宮2社をはじめ、14の別宮と43の摂社、24の末社、42の所管社から成る125社の総称であることはあまり知られていません。

瀧原宮は、別宮のなかでも皇大神宮に次ぐ高い格式を有する御社なのですが、世間あまり知られていないこともあってか、実際にお参りしてみると、人も非常に少なく、深い森の静けさのなかで凜とした空気を味わうことができました。

この後、最後の研修場所である、式年遷宮記念「せんぐう館」へと移動。

「せんぐう館」は外宮のそばにあり、展示物や映像により、式年遷宮に関するあらゆる事柄を学習することができます。

なかでも圧巻は、外宮正殿が原寸大で再現されていること。本物には近づくことができませんが、ここではそれが可能。巨大な建造物で、高さはビルの三階くらいあるそうです。

学芸員の説明により、この総ヒノキの木造建造物のなかに、1300年前から続く式年遷宮を通じて、最高の技術、最高の智慧がぎっしりと詰まっていることを実感しました。それは建築だけにとどまらず、製鉄、漆、織物、製紙…等々、あらゆる分野に波及していて、式年遷宮というものが、日本古来の伝統技術の集大成であるのだということであり、これはこの研修の大きな収穫でした。

残念ながら写真撮影は許可されず、映像での紹介はできません。せめて、せんぐう館への入館証に印刷してある絵を紹介します。これは、昭和4年に行われた式年遷宮の神事の模様だそうです。



以上で報告を終わります。

最後になりましたが、この研修にあたっては、全国会の会長であり、滋賀会の会員でもある浅香剛氏に大変お世話になりました。研修先の速水林業さんとの調整、瀧原宮と式年遷宮に関する現地での解説等、一手に引き受けていただきました。

厚く御礼申し上げます。

（報告 佐々木）